東京ジャーミイ金曜日のホタバ

２０１２年４月２７

信仰は希望の源である

親愛なるムスリムの皆様

信仰の、人間にとっての価値は、言葉で表現できないほど崇高なものです。信仰は生命に似ており、無信仰は死のようです。今日は、信仰について別の側面、希望という窓から見て、それが生命にもたらしているものを見出していきましょう。

信仰と希望は互いに切り離すことのできないものです。信仰を持つ人とは、大きな希望を持ち、広い考えを持ち、将来に対しても肯定的に見なし、幸福に最も近く不幸に最も遠い人です。なぜなら信仰とは、最も崇高な存在を信じることであり、そのお方に結びつくことです。そのお方は慈悲と慈愛で全ての人を包み込み、許し、また人々の後悔を受け入れられ、過ちを消され、悪を善へと変えられ、人にとって最も近しい者よりもさらに近く、絶対的な力の持ち主であられるからです。その崇高な力は、昼に罪を犯し悔悟する者のために夜、夜に罪を犯し悔悟する者のために昼、その慈悲によってしもべたちを包み込まれます。善に対し１０倍から７００倍、さらにはそれ以上の見返りを与えられる一方で、悪に対してはそれに等しい罰のみを与えられるか、あるいは許されるのです。

信仰する人々は、恐れを信頼に、弱さを力に変えられるのはアッラーであると知っています。「かれらは、必ず助けられよう。本当にわれの軍勢は、必ず勝利を得るのである。」（戦列者章１７２－１７３）という章句がそのパスワードです。病気になっても絶望することはありません。「かれはわたしを創られた方で、わたしを導かれ、わたしに食料を支給し、また飲料を授けられた御方。また病気になれば、かれはわたしを癒して下さいます。」（詩人たち章７８－８０）という信仰を持つからです。信仰する人は罪を犯していても許されるという希望を持ちます。なぜならアッラーの慈悲に絶望することはその信仰に反するからです。信仰する人は嫌になってうんざりすることもありません。なぜなら「本当に困難と共に、安楽はあり、本当に困難と共に、安楽はある。それで（当面の務めから）楽になったら、更に労苦して」（胸を広げる章５－７）という句は彼に忍耐と根気を獲得させるからです。また、「災難に遭うと、「本当にわたしたちは、　　アッラーのもの。かれの御許にわたしたちは帰ります。」と言う者、このような者の上にこそ主からの祝福と御恵みは下り、またかれらは、正しく導かれる。」（雌牛章１５６－１５７）という句は、かれにとっていつでも希望と努力の源となります。信仰する人は敵対する人々との間に友情をもたらします。「信仰して善行に励む者には、慈悲深い御方は、かれらに慈しみを与えるであろう。」（マルヤム章６９）

信者は年老いて髪が白くなっても希望を失うことはありません。なぜなら彼らは、アッラーが約束された天国に行くからです。アッラーの約束は真実です。そこには無益な言葉はなく、糧が朝晩与えられるでしょう。

彼らは「アッラーを讃えます。わたしたちから（凡て）の苦悩を取り除いて下された御方。わたしたちの主は、度々赦される御方、（奉仕を）十分に認められる御方です。」（創造者章３４）というドゥアーを絶やすことはありません。

これらは、幸福へと導く精神的な活力となり、信仰を持たない人が得ることのない、ただ信仰する人々にのみ存在する特性です。あなた方の心が信仰で、日々が希望で満たされますように。アッラーの慈悲、恵み、お許しがあなた方の上にありますように。